

日、中両語における指示詞の比較について

外山 美佐

要 旨

日本語の指示詞「コ、ソ、ア」は、中国人学習者が習得しにくい学習項目の一つである。教師が、教育現場で中国人学習者に日本語の指示詞を適切に指導し、正確に理解させるためには、日中両指示詞への対照言語学的アプローチが必要不可欠である。そこで、筆者はある仮説を立て、日本語の指示詞の用法を「場」¹⁾の各状況別に分類し、それにもとづいて、中国語の指示詞「这、那」との対照分析を行った。その結果、日本語では話し手、聞き手は、ある種のなわばり意識のもとにそれぞれの指示詞を使い分けているのに対し、中国語では、話し手は聞き手の領域を意識することなく、自分から対象までの空間的、時間的、心理的遠近判断、及び親疎の感情によって指示詞を使い分けていることが明らかとなった。

〔キーワード〕 指示詞、対照言語学的アプローチ、「場」の各状況別、なわばり意識、遠近判断

Contrast between Japanese and Chinese Demonstratives by Dialogue Situation

Toyama, Misa

In the study of Japanese as a foreign language, one of the most difficult issues for Chinese students is to master the correct usage of demonstratives such as “ko”, “so”, and “a”. The author believes a “contrastive approach on Sino-Japanese grammar” is essential to allow instructors to contribute maximally to their students’ proper understandings of their daily classroom lessons. She focuses on the remarkable difference in mental approach between the Chinese and Japanese languages in the choice of correct demonstratives, the so-called “territorial consciousness” between addressors and addressees distinguishing demonstratives in the Chinese language, which puts Chinese students in a difficult position for mastering Japanese demonstratives.

1. はじめに

日本語における「コ、ソ、ア」の使用上の区別及び概念規定については、「なわばり」説、「対立、融合型」説、「親近、疎遠、親遠」説など多くの研究が積み重ねられてきている。本稿では敢えてこれらの諸説には立ち入ることなく、正保(1981)の「対立型」「融合型」という区分を取り込み、この枠組みの中で指示詞の使われ方を見ていく。

まず、現場に話し手と聞き手がいて、話し手が聞き手を心理的に疎遠な存在とみなすような対立型の状況では、コとソ、そして弛緩したア²⁾が対立する。一方、話し手が聞き手を心理的に自分の領域に引き入れて考えるような融合型の状況では、コとア、そして弛緩したソ³⁾が対立する。

これに対して、中国語の指示詞は近稱の这と遠稱の那の二分割の体系を持っている。⁴⁾従来から中国語の指示詞は、「話者からの距離型」に属し、指示詞の選択の基準は、話し手からの主観的な距離の遠近に置かれ、話し手は聞き手の視点を導入しない(望月、1981)と考えられてきた。つまり、話し手が近いと感じている対象を这で示し、遠いと感じている対象を那で示すのである。

本稿では、以上のような日本語、中国語の現場指示⁵⁾の「コ、ソ、ア」「这、那」の用法が基本的なもので、これから非現場指示⁶⁾の「コ、ソ、ア」「这、那」の用法が派生されていると仮定し、以下のような日本語の指示詞の用法⁷⁾を、「場」の各状況別に分類した表に基づいて、中国語の「这、那」との対照分析を行う。

〈表1〉「コ、ソ、ア」の用法の分類

用法の名称		「場」の状況	指示対象
現場指示	知覚対象指示	聞き手は存在しない	知覚可能なもの
	対立型	話し手と聞き手のなわばり意識は対立している	、
	融合型	話し手と聞き手はなわばりの重なった我々意識をもつ	、
非現場指示	観念対象指示	聞き手は存在しない	観念対象
	対立型	話し手と聞き手のなわばり意識は対立している	先行談話
	融合型	話し手と聞き手はなわばりの重なった我々意識を持つ	先行談話
	照応指示	書き手は読み手が存在するものと仮定する	文脈
	絶対指示	聞き手との結びつきが弱い	割に定まっているもの

2. 現場指示における「コ、ソ、ア」と「这、那」の比較

2. 1 知覚対象指示

例1. (電車の網棚の上に忘れ物があることに気がついて一人言を言う)

「これは誰のだろう。」 [这是誰的?]

例2. (夜空を飛んでいる光る物体を見て一人言を言う)

「あれはなんだろう。」 [那是什仏?]

知覚対象指示の場合、話し手は現場にあるものを思考の対象として内言や独白を行う。日本語においては、話し手が主観的に対象を近いと感じれば「コ」で、遠いと感じれば「ア」で指示される。また、この用法では聞き手が存在しないため、「ソ」系で対象が指示されることはない。中国語の場合、例1にはこれが、例2には那が対応する。指示詞「这」・「那」の選択は、話し手の主観的な距離のとらえ方によって為されるため、この用法では日中両指示詞に相違点は見られない。

2. 2 対立型

例3. 医者「ここ、痛みますか。」

[这ル/那ル疼吗?]

患者「そこは、それほどでもありません。」

[这ル/那ル不太疼。]

この対立型では、話し手と聞き手が相対立している「場」が前提となっているが、現場指示において「コ、ソ、ア」の使い分けを律するのは、話し手のなわばり意識である。たとえば医師が患者を自分のなわばりに属すると考え、先に「コ」を使うと、患者はその部分に対する相手のなわばりを認めて「ソ」で答え、対立型が現れる。これに対して、中国語では「这ル/那ル疼吗?」「这ル/那ル不太疼。」である。この場合中国語では、聞き手側の領域を意識することなく、単に医者、患者ともに痛い場所が手の届く範囲内にあると判断すれば「这」を、手を伸ばしても届かない範囲にあると判断すれば「那」を使うようである。次の例も、現場指示の中国語は「話者からの距離型」に属するという説を支持するように思われる。

例4. ⁸⁾「意図は別にある」

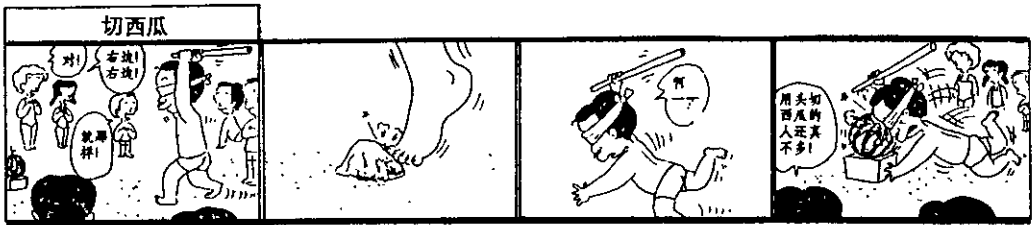


[②父「阿浩を見てごらん。」「花の中から何かを感じたようだ。」③母「この子は、若いのに風雅ね。」父「俺が子供の時は、もっと目先の欲得の方に目が行ったものだけどね。」「あいつはきっと大物になるぞ。』

この場合、母親、父親の両者から対象（子供）までの距離は同じにもかかわらず、母親は「这孩子」と「这」を使い、父親は「那家伙」と「那」を使っている。母親が「这」を使っているのは、自分から子供までの距離を近いと感じているからであり、父親が「那」を使っているのは、子供が家族一同と座っていないために、自分とは離れた所にいると感じているからである。この場合父親は、もし子供が少し自分から離れた位置にいたとしても同じ場所に座っていたら、「这」を使うはずである。

次の例では、日本語で同じ場面を示してみた。外野の応援者達は「ソ」系の指示詞を使うが、中国語では「这」も「那」も使用可能である。話し手が、目隠しをしている人物といっしょにゲームをしているように感じ、心理的に対象と近い所にいれば「这」が、話し手が、対象を客観的に観察し、対象は自分から離れた所にいると感じれば「那」が使われる。

例5. ⁹⁾「すいかを切る」



〔①子供達「そう。」「左右。」「そのように。」③「あ。」④子供「頭を使ってすいかを切る人は、滅多にいないよね。〕

しかし、中国語においても現場指示で聞き手がいる場合、対立的視点を作るために、聞き手側の領域を「那」で示すことがある。

例6. ¹⁰⁾「別にけちだって訳じゃない」



〔①部下「課長。」「それは、私のなんです。」②「あ。」③課長「大した事じゃないだろう。」「たった一切れの刺身なのに。」「何を気にするんだ。」部下「え。」④部下「私が言ったのは私の使った箸だと言うことですよ。〕

この例では、課長は部下の箸を使って食事をしているのだが、話しに夢中なあまり、課長はその

ことに気づいていない。部下は箸がごく近くにあるにもかかわらず、「それは、私のなんです。」と「那」を使っている。この場合、話し手（部下）が、箸は聞き手（課長）の領域（課長の手の中）にあると感じていれば、対立型の「那」が現れ、話し手が箸を指さしながら、「これは、私のなんです。」と言えば、融合型の「这」が現れる。この例を見ると、現場指示の場合、中国語の指示詞は一部聞き手の領域を認めている場合もあり、単純には中国語の指示詞が、話し手からの「距離型」に属するとは言い切れないことがわかる。

2. 3 融合型

例7.（初め店員、客ともに手元にある洋服を見る。次はかなり離れた棚にある洋服を見る。）

店員「こちらなど、最近流行のデザインですが。」 [这边的这些、是最近流行的式样.]

お客「これ、サイズはいいんだけど、 [这件、大小正合适、可是式样（有点）.]
デザインがちょっとね。」

店員「あちらはいかがでしょう。」 [你看看那件怎么样?]

お客「あれは、少し大きいわよ。」 [那一件、太肥.]

融合型において日本語では、話し手は聞き手との我々意識のもとに、我々の領域内で近くにあると感じた時に「コ」を、領域外でやや近くにあると感じた時に「ソ」を、領域外で遠くにあると感じた時に「ア」を選択する。一方、中国語では話し手と聞き手は我々意識を共有せず、各自自らの主観的遠近観から指示詞を選択する。では、同じ現場指示において、正保(1981)の言う融合型の場面に現れる弛緩した「ソ」は、中国語においてどう現れるだろうか。

例8.

乗客 「そこの煉瓦色の建物の前で止めてくれ。」 [请给我停在那个砖色楼房前边.]

運転手「その大きな建物ね。」 [那个大楼吧?]

この例ではタクシーの乗客が、運転手に向かって「(20メートル位先にある)建物の前で止めてくれ」と言う場合に、中国語では、乗客、運転手ともに「那个」を使う。このことは中国語において、「这」と「那」のどちらの領域にあるのか決定しがたい範囲を表す場合、「ソ」系の指示形式を持っていないこともあって、「那」に含めて表すということを示している。つまり、「那」の領域は、日本語の弛緩した「ソ」と、「ア」を合わせた範囲であると言える。

3. 非現場指示における「コ、ソ、ア」と「这、那」の比較

以上、日本語と中国語の現場における指示詞用法の差を見てきたが、両者の顕著な違いが現れるのは、むしろ現場指示より非現場指示においてである。以下、この非現場における日本語と中国語の相違点を明らかにしてゆくが、分析の前にまず、中国語の「这」と「那」の各々の出現を規定する基本ルールを予め示しておく。すなわち、両者の出現は、現場指示において「話し手が対象を近距離にあると判断した場合に这が使われ」、「話し手が対象を遠距離にあると判断した場合に那が使

われる」というルールによって規定される。そして、非現場において「这、那」の出現を規定するものは、この基本ルールを空間的、時間的、親疎レベルにまで拡張したものである。以下これをもとに、「这」と「那」の用法を検討してゆく。

ルール 1-0-近距離にある対象には「这」を使う

1-1-親しい人物には「这」を使う

1-2-発話現場にある／現場から姿を消したばかりの対象には「这」を使う

1-3-時間的に近距離にある対象には「这」を使う

(現在進行中、近い過去、近い未来)

1-4-今話している会話の内容には「这」を使う

ルール 2-0-遠距離にある対象には「那」を使う

2-1-親しくない人物には「那」を使う

2-2-発話現場に存在しない対象には「那」を使う

2-3-時間的に遠距離にある対象には「那」を使う

(過去、未来のこと)

2-4-過去に話した会話の内容には「那」を使う

2-5-話し手がその指示対象を知っている場合には「那」を使う

2-6-多くの人に知られている対象には「那」を使う

} A

} B

(ルール2では、対象への親しさのレベルに差があるため、0-4をAレベル、5、6をBレベルとする。)

これらとは別に、中国語においては第三人称を示すものとして「他(男性)」「她(女性)」という人称代名詞が存在する。この人称代名詞は、日常の話し言葉では指示代名詞より使用頻度が高く、多くの場合指示代名詞と交換可能である。

3.1 観念対象指示

観念対象指示に現れる指示詞は、話し手の思い出や記憶の中に存在する対象を指し示すものである。この場合、話し手は聞き手の存在を考慮せず、一方的に自己が関心をよせているものを指す語として指示詞を用いている。時間としては、現在から隔たりのある時を示すため、「ア」系が用いられることが多い。

例9。(ガスをしめ忘れたことに気づいて)

「私としたことが、これはどうしたものか。」 [我这是怎从搞的?]

例10。(これから行くであろう海外赴任地のことを考えて)

「それは、どんなところだろうか。」 [不知道那是个什从样的地方呢?]

例11. (夫が妻に)

「あのいつものあれ、また食べたいな。」 [还想吃以前常吃的那个.]

例9の場合中国語では、ガスをしめ忘れたという事実を話し手が時間的に近距離にあると感じて、ルール1-0により「这」が選択される。例10では、単に対象が発話現場に存在しない(ルール2-2)、例11では、いつか以前に食べた物は時間的に遠距離にある(ルール2-3)という理由により、「那」が用いられる。次の例の場合も、話題は話し手、聞き手の了解事項になっていないため、話し手の心の中にあるもの(内面指示)を示すために「ア」が用いられている。

例12.

A「～さんのデビュー時代の思い出にはどんなものがありますか。」

[一、当你回想初次登台的那个年代、有什么事情是忘不了的?]

B「そうですね。あの時代は、本当にギャラだけでは食べていけなくてね。

毎日パンの耳ばかり食べていましたよ。」

[是呀、那个年代光靠演出费是维持不了生活的。每天净是啃面包皮。]

例13. ¹¹⁾ [それぞれ利益不利益がある]



[①試合はまだ行われておりますが、番組放送は中止にしなければなりません。夫「ふん。」②夫「現場では、あの種類の不愉快な出来事はなくなるな。」③☆試合延長となる。妻「遅くなると電車がなくなるわよ。」④夫「試合は行われているが、私達は家に帰らなければならない。』

例14. ¹²⁾ [強い女房は困ったものだ]



[①夫「今晚ちょっと帰りが遅くなる。」妻「最近、毎日ずいぶん遅いのね。」②夫「男のつきあいだ。おまえはだまってる。」「おれは帰ってきたら、お茶漬だけでいいよ。」③妻「あのような(男尊女卑の態度をする)男は一回とちめてやろう。」④運転手「植田。植田。ここには植田という姓はないよ。』

例12の場合、指示対象は時間的に遠方にあり、話し手の直接体験に基づくコンテキストの中で語られているだけで、聞き手には共有されていない。中国語ではルール2-3により那時候が使われるが、話し手の言う時が発話時から空間的、時間的に遠方にあるという理由から「那」が用いられている。

例13は、テレビでの野球観戦では延長戦の時、番組が打ち切りになってしまうことに不満だった父親が、直接野球場に観戦に行き、一人言を言っている場面である。この場合、日本語で使われる指示詞は「ア」である。中国語でも「那」が使用されているが、「那」の指示する出来事は、話し手の今いる野球場から距離的に遠く離れた所（家）で起きたことであるため、ルール1-3により「那」が使われている。従ってこの場合、「这」は使用できない。

例14の例も話し手の一人言だが、中国語ではこの場合にも、「这」は使われない。その理由は、ここで使用されるべき指示詞は、主人が過去に言った会話の内容を指し示すものであり、ルール1-4から「那」が使用されるからである。

以上のことから、日本語における非現場の観念対象指示の用法は、聞き手の存在を意識しない現場指示における知覚対象指示の用法と重なっていると思われる。それに対して、やはり中国語では、ルール1-0-4、ルール2-0-4の対立を立てて「这」が使われたり「那」が使われたりしていることが明らかとなった。

3. 2 非現場指示（対立型）

対立型の状況において、話し手は自分のなわばりと相手のなわばりの区別を強く意識している。この場合日本語では、相手の発言内容を相手側の領域に属するものとして「ソ」で指示する。

例15.

A 「故宮博物館へ行ったことある？」 [你去过故宫博物館嗎?]

B 「ううん。それは、どんなところ？」 [嗯。那是个什幺样的地方?]

この場合Bは、Aの発言内容は自分の認識範囲に属せず、相手の領域内にあるものと判断して、「ソ」で指示している。そのため、この場合は、「ソ」を「コ」で入れ替えることはできない。中国語の指示詞は、聞き手の領域を意識せずに話し手だけで使用が決定できるため、ルール1-3により、行ったという事実をAが話している今、その時を時間的に近距離であるとして「这」を用いる。この場合、もと話し手が、事実の発生時（過去時）に着目したとすると、「那」が使われる可能性がある。つまり、中国語ではこの場合、話し手が対象を時間的にどこに存在すると感じるかによって、「这」と「那」が使い分けられるのである。

次も時に関係のある例である。

例16. ¹³⁾ [残業]



- [①妻「え、残業で家に帰るのが少し遅くなる。」「でも私達はあなたを待ってるところなのよ。」
 ②妻「今日はあなたの誕生日よ。」夫「忘れていた。」「おまえは、なんだって早く言わないんだ。」
 ③妻「あなたを喜ばそうと思ったの。」「あなただって、今日残業するって言わなかったでしょ。」
 ④夫「そんな¹⁴⁾重要なことは、早く言わないと。」]

この場合日本語では、誕生日のパーティというアイデアも、それに関する妻の発言内容も、夫側から見て聞き手側の領域に存在すると考えられて「ソ」が選択される。この漫画の中国語訳では「那」が使われているが、話し手（主人）は今電話で話している最中だから、話し手が現在時に関心を払う場合は「这」を使うというルールにより、「这」が選択される可能性もあるということであった。これに対して、話し手が受話器を置いた後に、あるいは何日か後に、妻の言ったことについて触れる時は、過去時を示す「那」が使われる。

次の例も日本語では、父親は子供の発言内容を子供の勢力範囲内にあるものとして、「ソ」を使っているが、中国語では「那」が使われている。これも同様に、話し手対聞き手の領域意識ということではなく、子供の言及している風車が物理的に発話現場に存在しないので、話し手にとって風車は心理的に遠くに存在しているという意識が働き、ルール2-2が適用されて、話し手は「那」を使用しているのである。

例17. ¹⁵⁾ [李が桃にすり代わる]



- [②息子「ほしい、ほしい。」母「だめです。なんでも見るとすぐほしがる。」父「何、風車がほしい。」③父「そんなものなら、家にもあるよ。」息子「え、パパ、万歳。」④友達「おまえ、これ持って走るのか。」]

以上から、日本語の指示詞は非現場対立型の場面において、現場対立型の用法と同様に、話し手のなわばり意識と聞き手のなわばり意識とを対立させてとらえているのに対し、中国語の指示詞の選択は、話し手中心の距離的、時間的、心理的距離という発想にもとづいてなされていることがわかる。

3. 3 非現場指示（融合型）

次に、融合型の状況下で使用される非現場指示の「ア」について考えてみる。日本語では談話の中で、話し手と聞き手が同じ対象に対して共通の理解を有しており、かつその対象が空間的時間的に遠方にある場合、「ア」が用いられるが、話し手が聞き手に、部屋から出て行ったばかりの人物について語る場合においても「ア」が使われる。

例18. 「あいつ、彼女ができたんだよ。」¹⁶⁾① [这家伙已經有了女朋友了.]

つまり、その人物が姿を消したばかりであっても、日本語では記憶として扱われ、「ア」で指示される。同様に、死んでしまって今はいないある人物のことを語る時も「ア」が使われる。

例19. 「あいつ、いいやつだったんだ。」 ② [那家伙不錯.]

①のあいつは、中国語ではルール1-2により、这家伙が、②のあいつは、中国語ではルール2-2により、那家伙が使われるが、その今は亡き人が、話し手にとって親しい間柄だった場合は、1-1により这家伙が使われる。そして、通常①②の場合ともに他/她が使われることの方が多い。これは「他/她」が、一度現場あるいは会話に登場した対象を指示するために使われる人称代名詞で、かつ这个（这家）、那个（那家）が人間に対して用いることが語用論的に不適切なことがあるため、そのギャップを埋めるために存在しているのだと思われる。

日本語でもこの場合、第三人称代名詞が使用され得るが、指示代名詞をこれに当てることの方が一般的である。これは、第三人称代名詞が元々は日本語には存在しなかったということもあるだろうが、日本語が元来自分の領域にとどまらず、相手の領域をも意識しながら対話を行う言語であることの現れであると思われる。日本語では、このような非現場において、現場の外縁部に存在する対象には「ア」しか用いられないが、中国語では、非現場の対象に対して、発話現場から姿を消したばかりなのか、もともたらないのか、あるいは親しいのか、親しくないのかの対立を立てて、「这」が使われたり「那」が使われたりするるのである。次の例ではどうであろうか。

例20.

A 「この間見せた論文のことだけど、どう思う。」 [前几天给你看的那篇论文、你看怎么样?]

B 「よく書けていると思いますよ。」 [我看写得挺好.]

A 「あれには、ずいぶん時間を費やしたんだ。」 [写那篇论文、可花了不少时间(哪).]

C 「私もその論文を拝見してみたいですね。」 [我也想看那篇论文.]

中国語でも「那」が使われるが、この場合は日本語のような話し手と聞き手による話題の共有という視点から「那」が使われている訳ではなく、ルール2-2、2-3により、論文は発話現場に

存在せず、しかも会話の時点から見ると遠く隔たった時に示されたものなので「那」を使っているのである。しかし、論文はA、Bにとっては了解事項であるが、Cは論文について直接的知識を有していない。そこで日本語の場合Cは「ソ」を用いているが、中国語では、Cが論文について直接的知識を有しているか否かに関係なくルール2-2、2-3により「那」が用いられる。

次の三つの例でも、中国語では、日本語における話し手、聞き手による話題の共有という視点とは異なった視点から、指示詞が選択されている。

例21. ¹⁷⁾ [正体がばれた]



[①父「あきが一番好きな若い歌手だ。」③父「サインをお願いします。」④「あいつは、筆を使って正体がばれたな。きたない字だ。」]

この例は、中国語において対象が発話現場に存在しないという条件は、例20と同じにもかかわらず、実は「这」も「那」も使われ得ることを示している。その理由は、もし話し手（父親）が色紙にある歌手の名前を実物の歌手に見立てて考えるなら、対象は近距離にあるのでルール1-0が適用されて、「这」が使われ、対象が発話現場にいないという事実に着目すれば「那」が使われるからである。

次は両者共通の「場」を話題にしている融合型の例である。中国語では、「这」も「那」も使われる可能性がある。

例22. ¹⁸⁾ [長いこと準備してきた]



[②友人「きみの奥さんと娘さんのチームが勝った。」父「勝ってよかった。」③父「お前達二人は力があるんだな。」娘「あれは常日頃の練習の結果よ。」]

しかしながら、この「这」は二通りの解釈が可能である。一つは、綱引きゲームは今しがたまで

話し手の眼前で行われていたとした場合、ルール1-2が適用されて、「这」が使われる。他方、現在進行中の話し手（聞き手も可）の会話を指示した場合は、ルール1-4により、やはり「这」が使われる。しかし、もしこのゲームが過去の出来事（何日前）であったとすれば、当然ルール2-3により「那」が選択されることになる。

次の例で使えるのは、「那」のみである。この場合、たった今石鹸水は父親に飲まれてしまったばかりである。にもかかわらず、ルール1-2は適用されない。コップの中にあった石鹸水はすでに発話現場にはなく、父親の腹の中にあるため、対象は今そこに存在しないという事実のみが強調されて、ルール2-2により「那」が使われるのである。

例23. ¹⁹⁾ [とても暑い日]



[①母「お帰りなさい。」父「今日は、本当に蒸し暑い。」②父「あ、阿浩。」「おれにちょっと飲ませてくれ。」③息子「あ、飲めないよ。」父「どうして飲めないんだ。けち。」④息子「あれは、石けん水なのに。」]

日本語では、談話の中で話し手と聞き手が話題を共有しており、対象が空間的・時間的に遠方にある場合、「ア」という指示詞が用いられる。これは話し手と聞き手がなわばりの重なった我々意識をもつ現場指示融合型の場面に現れる「ア」の用法から派生したものである。一方、中国語では、話し手、聞き手は、対象が空間的に近距離に存在するのか（ルール1-0）／しないのか（ルール2-0）、対象が発話現場に存在するのか（ルール1-2）／しないのか（ルール2-2）、時間的に近距離に存在するのか（ルール1-3）／しないのか（ルール2-3）、今話している会話の内容なのか（ルール1-4）／過去に話した会話の内容なのか（ルール2-4）といった対立を立てて「这」か「那」かの選択を行っているのである。

しかし、実際は聞き手が対象を知らなくても、その対象が有名で、話し手は聞き手が当然に知っているものであると考えてその対象を話題にする場合、両語指示詞の相違点は見られない。

例24.

A 「故宫博物館って何。」 [故宫博物館是什麼?]
 B 「あなたあの有名な場所を知らないの。」 [你連那麼有名的地方都不知道嗎?]

この場合日本語では、Bは故宫博物館をAも知っているべきだという意識から、共通理解の指示

詞として「ア」を使っている。中国語では、ルール2-6（Bレベル）が適用されて、那も有名が使われる。この場合は、話し手と聞き手は同一の話題を共有しているから「那」を使うという点で、日本語の「ア」と中国語の「那」の用法に差は見られない。

さて、日本語において、聞き手が対象を知りえない場合に、同一文中に「コ」、「ソ」のいずれもが使われる場合がある。その場合、話し手がその対象を自分にとってかかわりが深いものとみなして、自分の領域にひきつけて会話を進めれば「コ」が使われ、その対象を客観的にとらえれば「ソ」が使われる。

例25.

「昨日バンドの演奏を聞きに行ったんだけど、この／そのバンドの演奏がすごくてさ。」[昨天我去听了乐队的演奏、那个乐队的演奏真没说的.]

この場合、中国語では「那个」しか使われない。その理由は、この会話に出てくるバンドはその場に存在しないバンドだからである。

次の例においても、初め日本語では、聞き手は対象を知りえず、かつ話し手は聞き手の存在を意識していない。この場合、話し手が対象を談話の中で聞き手に紹介後、指示詞の使い方をどう変化させるのかを見てみる。

例26.

A「昨日友達に会ってね。そいつは、おれの幼なじみなんだ。」

[昨天我看見了我的朋友、那家伙是我的老朋友.]

B「へえ、幼なじみに。」

[艾、你的老朋友.]

A「そいつは、昔から本当におもしろいやつでね。」

[这家伙、以前就很有意思.]

[那家伙、以前就很有意思.]

初め、ルール2-5（Bレベル）により那家伙が使われるが、談話の中でAが幼友達を紹介したことでBはその人物を知ったことになり、そのため次の文で、Aは这家伙を使う可能性が出てくる。が、もしAが幼友達は発話現場にいないという事実に着目した時は、ルール2-2により、那家伙が使われる。この場合、日本語では、Aが自分の友人を談話の中で出したとしても、Bがその人物を直接的に知らない限りは「ア」を用いることはない。しかし、中国語では、一度話題に登場した人物には、二度目には、聞き手が対象を直接的に知っているか、いないかにかかわらず、ルール2-0及びルール2-2によって「那」が使われるとともに、「这」が使われることがある。

4. 照応指示

照応指示において、対象は、話し手の経験的知識とは無関係なものである。話し手が、先行の叙述内容を自分の領域外のものとして、客観的に指し示したい時「ソ」が選ばれ、叙述内容を話し手

自身のものとして、現場指示的に生き生きと示したい時「コ」が選ばれる。

例27. ²⁰⁾山沿いの地方では、雪が積もる。これは／それは冬の季節風が日本海上を越える時に多量の水分を含み、この／その風が山地にあたって日本海側の地方に雪をたくさん降らせるからである。

[沿山地帯冬季容易积雪。这／那是因为冬天的季节风经过海面时，带来大量水分。这／那种风与山撞击后，日本海岸处降下大量的雪。]

例28. ²¹⁾津田梅子は5人の女子留学生を連れて行きましたが、この／その中で一番若かったのがこの津田梅子でした。

[津田梅子带去了五个女留学生，这／那五人之中最年轻的是这位津田梅子。]

例29. ²²⁾日本の気候は地方や季節によって、このように違う。このことは人々の生活様式に大きな影響を与えている。

[日本的气候、由于不同地区和季节的影响而有这样大的差异。这种现象给人们的生活方式带来了很大影响。]

例30. このことは秘密にしておいてほしいんですが。実は結婚した事があるんです。

[这件事情你一定要保密，我其实是结过婚的。]

上の例を見てもわかるように、日本語では、「コ」は書き手が読み手の前に、読み手にとって未知の情報をありありと説明するかのような効果を与えるようである。つまり、「コ」が使われる時、読み手は書き手のなわばりの中に導かれ、書き手のなわばりの中で書き手と情報を共有することになるのである。例29の場合、中国語でも使われる指示詞は「这」である。これは、「这」を使うことによって、読み手にも自分自身がその現場にいるかのような効果を与えるということである。例30の後方照応では、中国語でも「这」が用いられる。これは、ルール1-4により、今話している会話の内容を現場指示的に示すためである。

5. 絶対指示と発話時

以上、現場指示、非現場指示、照応指示における日中両指示詞の用法の差を見てきたが、最後に、先行文脈なしに用いられ、指示対象が常に定まっている絶対指示について考察してみる。これを堀口(1978)は、指示詞の絶対用法と呼んでいるが、ここでは、この用法の中でも特に時に関連した例を挙げ、絶対指示の「コ」と、「ソ」と「ア」との関係に注目して行く。

例31.

この／*その／*あの夏私は忙しい。 - I

この／ その／ あの夏私は忙しかった。 - II

この／ その／*あの夏私は忙しくなるだろう。 - III

福原(1991)は、時間の「コ、ソ、ア」を上例文から分析し、「コ」は発話時を示し、「ソ」は発話時を示せない、「ア」は過去時しか示せないとし、さらに、「コ」と今とを比較した結果、「コ」

は発話時そのものというより、発話時を含んだ周辺時間帯を指しているのではないかと述べている。

这 / *那 夏天 我很忙。－Ⅰ

这 / 那、(那) 年夏天 我很忙。－Ⅱ

这、(这) / *那、(那) 夏天 我很忙。－Ⅲ ※()は照応指示である。

ここでは、日本語と中国語の指示詞の発話時との関係を考察するために、形容詞には時制として過去形がない中国語をあえて日本語の例文Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに当てはめて見ていく。まずⅠを見てみると、日本語の「コ」に相当する「这」のみが使用可能である。「那」が使われない理由は、現在から近未来までの時を示している日本語文と、時間的に遠方を示す(ルール2-3)「那」とは相容れないからである。

Ⅱは日本語の文と同様に「这」、「那」ともに使える。たとえば、「这」は这今年夏天我很忙に書き換えられる。これは話し手が、その年の秋か冬に過ぎ去ったばかりの今年の夏について述べているものなので、時制は過去であるが、時間的に近距離というルール1-3に含めて考えていいと思う。「那」は、照応指示と過去時を示す「那」である。照応指示の場合、「那」の示す夏を特定するためには、たとえば1990年夏天有会、那年夏天我很忙(1990年に会議があった。その年の夏私は忙しかった。)のような先行文脈が必要である。過去時を示す「那」の文が示す夏は、何年か前の夏である。

Ⅲは「这」と照応指示の「这/那」が可能である。「这」の使われる文で、話し手が述べている夏は、これからやってくる夏である。時はルール1-3の近い未来を示している。照応指示として、先行文脈の指示時間を明らかにするためには、たとえば2000年夏天有会、这/那年夏天我大概很忙(2000年に会議があります。その夏私はたぶんとても忙しいだろう。)のような文脈が必要である。話し手が、2000年を近い未来だと考えた場合は「这」が選ばれ、遠い未来のことだと考えた場合は「那」が選ばれる。

以上からわかることは、中国語の場合も日本語と同様に、「这」は話し手の発話時を含んだ時間的に近距離にある時を指し、「那」は過去の時を示すということである。また、照応指示詞としては「这」も「那」も使用され得る。ただし、「那」の先行文脈の指示時間は、過去時も未来時も示すことができるが、「这」の場合は過去時を示すことはできないのである。

6. おわりに—まとめとして—

以上、日中両語における指示詞を用法・「場」の各状況別に比較対照を行い、相違点をまとめてみたが、両語の指示詞とも現場指示における基本的性質から派生して、すべての用法に使われていることが明らかとなった。そして、日本語の指示詞の用法の特徴は、やはり話し手と聞き手のなわばり意識と関係が深いところにあるようである。特に「ア」について言えば、「ア」は話し手と聞き手の情報に対する共通の理解を前提とするため、両者の協力関係なしに発話は進行しない。

このような日本語の指示詞の特徴は、日本人の会話の仕方とも関連があるように思われる。一般

に日本人の会話は、相手との融和的な関係を重視し、対立的な関係であることを最小限に押さえようとする特徴がある。すなわち、初めに聞き手と対象についての知識の共有がなくとも、話し手は聞き手との対立的な立場を避けるために、指示詞を使って、会話の流れを調節しつつ融和的な場にもっていく。一方、中国語では、一部聞き手のなわばりを意識している場合が見られたが、基本的には話し手から対象までの空間的、時間的、心理的距離や親疎の感情によって「这」か「那」が選択されており、この点で、日本語の指示詞の用法と大きく異なることが明らかになった。

複文レベルの表現も十分にできるようになった上級の中国人学習者でも、指示詞の習得が困難な理由がここにある。さらに言うなら、「コ、ソ、ア」の使い分けの誤用を生む原因は、教授法とも深く関係していると思われる。「コ、ソ、ア」は初級のごく初期の段階で導入されるが、その際の「コ、ソ、ア」の使い分けは、現場指示における基礎的な概念規定である。初級を終えてさらに中級へと進んでいく学習者には、非現場指示、照応指示の「コ、ソ、ア」を適切に指示してゆくことが必要不可欠である。それは、母語の指示詞の体系が、日本語の指示詞のそれと異なる場合に、母語からの安易な類推によって、「コ、ソ、ア」の用法が誤って習得されていく可能性がきわめて高いからである。

母語と日本語との体系上の違いが、中国人学習者に日本語の指示詞習得を困難にさせる要因の一つであることは、まちがいないようであるが、以上の考察で明らかになように、筆者の中国語力に限界があるため、本稿の対照分析には不十分な点が多々あったと思われる。今後の課題は、本稿での結果を教育の場において、具体的にどのような形で反映させていくかということである。実務的には、本稿で得た日中両語における指示詞の構造上の違いを以前より強く意識しながら毎日の授業に取り組むことになるのだが、そういった日々の体験から更にデータを拾い、この課題を掘り下げて行こうと思う。

注

- 1) 客観的な存在としての場面が、言語主体の意識の中に映し出されたものを指す。
- 2) コとソのいずれの範囲にも属さない対象を指示する状況で使われる指示詞。
- 3) コで指示するには適当ではなく、アで指示するには近すぎる状況で使われる指示詞。
- 4) 中国語の指示詞のシステムの内から、本稿では日本語のコレ、ソレ、アレの形式に対応すると考えられる「这、那（形態的な核）」「这个（这家）、那个（那家）」を取り上げて分析する。
- 5) 話し手と聞き手が存在し、対象が話し手と聞き手の双方に見えるような状態で存在するような状況をいう。
- 6) 現場指示と異なり、知覚の可否には無関係にどんな素材も対象とし得る。
- 7) 用法の名称は、一部、堀口和吉(1990)の用語に従った。
- 8) 『糊塗老爹』P82
- 9) 『糊塗老爹』P32

- 10) 『糊塗老爹』 P29
- 11) 『糊塗老爹』 P37
- 12) 『糊塗老爹』 P19
- 13) 『糊塗老爹』 P67
- 14) そんなは、規定語（連体修飾語）であり、指示語として分類することはふさわしくないかもしれない。
- 15) 『糊塗老爹』 P2
- 16) 中国語では人間を対象に「这个」「那个」用いることは失礼にあたるため、このような文は、文脈によっては語用論的適性を欠いた文であることがある。が、日本語でも、語用論的にコレ、ソレ、アレを人間に対して用いることには制約がある場合がある。
- 17) 『糊塗老爹』 P75
- 18) 『糊塗老爹』 P50
- 19) 『糊塗老爹』 P8
- 20) 『日本語中級1』 P5
- 21) 『日本語中級1』 P9
- 22) 『日本語中級1』 P5

引用作品

1. 植田まさし 戈紅（中国語訳）（1992）『糊塗老爹』中国妇女出版社
2. 東海大学留学生センター（1979）『日本語中級1』東海大学出版会

参考文献

1. 大河内康憲（1981）「这、那、同」『中国語』NO. 253内山書店
2. 神尾昭雄（1985）「談話における視点」『日本語学』4巻12号 明治書院
3. ———（1990）『情報のなわ張り理論：言語の機能的分析』大修館書店
4. 木村英樹（1988）「指示と量詞」『中国語』NO. 347内山書店
5. ———（1990）「中国語の指示詞」『日本語学』3月号 明治書院
6. 金水敏（1988）「日本語における心的空間と名詞句の指示について」『女子大文学』39（大阪女子大学）
7. ———（1990）「指示詞と談話の構造」『言語』4月号 大修館書店「方向と選択」『日本語学』3月号 明治書院
8. 久野暉（1973）『日本文法研究』大修館書店
9. 黒田成幸（1979）「コ、ソ、ア」について『英語と日本語と：林栄一教授還暦記念論集』くろしお出版

10. 顧海根(1981)「中国入学者によくみられる誤用例(二)」『日本語教育』44号 日本語教育学会
11. 近藤泰弘(1990)「構文的に見た指示詞の指示対象」『日本語学』3月号 明治書院
12. 坂田雪子(1971)「指示語コソアについて」『東京外国語大学論集』21
13. 佐久間鼎(1966)『現代日本語の表現と語法』恒星社厚生閣
14. 高橋太郎(1990)「指示語の性格」『日本語学』3月号 明治書院
15. 田窪行則(1990)「対話における聞き手領域の役割について」『認知科学の発展3:メンタルスペース』(日本認知科学会編)講談社
16. 田中 望(1981)「コソアをめぐる諸問題」『日本語の指示詞』国立国語研究所
17. 堀口和吉(1990)「指示詞コ、ソ、アの表現」『日本語学』3月号 明治書院
18. 正保 勇(1981)「コソアの体系」『日本語の指示詞』国立国語研究所
19. 三上 章(1955)『現代語法新説』刀江書院
20. 望月八十吉(1974)『中国語と日本語』光生館

(本稿における中国語の分析については、早稲田大学の張継濱先生にいろいろご教示いただき、ここに感謝の意を表します。)